こども読書活動交流集会

高柳芳恵さん講演会
自然はふしぎがいっぱい！
－好奇心をかきたてる身近な自然との向き合い方－

■はじめに

高柳芳恵さんは、1948 年生まれ、絵本作家、サイエンスライター、科学読物研究会会員として、多岐にわたり活動をされています。代表作には、『葉の裏で冬を生きぬくチョウ』（偕成社）などがあり、今回はドングリやセミ、草花あそびについて、ご自宅からオンラインで実演を交えながら講演していただきました。

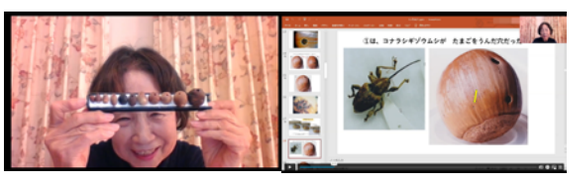
■ドングリ

ドングリの穴を追いかけて、『どんぐりの穴のひみつ』（高柳芳恵文　つだかつみ絵　偕成社）という本を書きました。昔、幼い娘と遊んでいた時、ドングリこまを作り、まわしていると、シギゾウムシの幼虫が出てきました。ふらっふらと歩く幼虫をじっとみていると、「あら、かわいい!」と思いました。そして、あんな小さな穴からどうやって出てきたんだろう、見てみたいなと思ったのがドングリの穴にひかれるきっかけでした。

自然の中のことはわかっているようでわかっていないことが多いものです。だから皆さんも面白いなと思ったらもうちょっと深く頑張ってみてみると、世界中の誰もみたことがないことを発見できるかもしれませんよ。自然にはね、人間の知っていることなんてひと握りだな、なんて思うんですよ。

夏の終わり、ドングリがついている葉が落ちているのを見たことがありますか。2、3枚の葉とドングリがついていて、切り口がスパッとナイフで切ったようなもの。これはハイイロチョッキリが卵を産んだドングリです。詳しくは、『どんぐりをおとしたのはだれ?』（高柳芳恵文　はたこうしろう絵　福音館書店）を読んでみてくださいね。

最初はきらいと思っても、その生き物がどんな生き方をしているかを知ると、気持ちが悪いという壁が取れて、見方が変わることがあります。私も娘とドングリこまをまわさなかったら、幼虫を土に捨てていたと思います。本当にちょっとしたきっかけで気持ちが変わります。相手のことをよく知ることで理解できる、知らないから怖い。これは虫だけに限らないことだと思います。相手を知ることが相手を理解する第一歩かなと思いました。



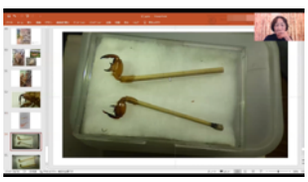
※穴あきドングリによる演奏（左）、クヌギシギゾウムシが卵を産んだ穴（右）

■セミ

セミは、どんな枝や幹に卵を産んでいるでしょう?枯れた小枝やすでに組織が死んでいる古い樹皮に卵を産んでいます。生きた枝には、産卵しません。さあ、どうしてでしょう?自分で考えてみましょう。答えが分からない現象を見たときに、「もしかしたら、こうかな?」と考える、そこが私は一番好きで、「どうしてなの?」とセミに聞きながら自分で一生懸命考えています。

セミの幼虫は、卵から出てくるときは、全身うすい袋をかぶっており、袋から出て初めて6本の脚が見えます。それは、カマキリの幼虫とおなじです。袋に保護されて卵の殻から出てくれば、きゃしゃな脚が傷つかないからでしょう。そのあと、幼虫は地に潜っていき、長い年月を土の中で過ごします。『せみのぬけがら』（高柳芳恵文　城芽ハヤト絵　福音館書店）この本には、私が感じたセミの抜け殻の魅力を書いています。

※セミのぬけがらの前足を使ったあそび



「キセル」として煙の代わりに出てきたのは「水」でした。噴水遊びです！

■きっかけは一冊の絵本から

『ふゆめがっしょうだん』（冨成忠夫写真　茂木透写真　長新太文　福音館書店）この絵本に初めてあったときに思ったことは、「これって本物なんだ、さみしそうに見える木にこんなかわいい顔があるんだ！見てみたい！」ということでした。

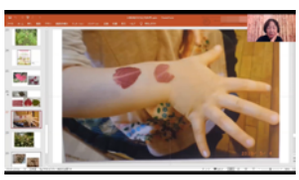
子供の科学の本というのは、どのようにして子供の好奇心を引き出すかっていうのが一番の大きな課題ですよね。

この絵本を読んだあと、外に飛び出していきました。落ちていく葉っぱにもおんなじ顔を見つけて、とてもうれしくなりました。

2月末、コップに入れておいた小枝の冬芽からなみだが出ていたんです。コップの水が枝先へと上がってきたんだと思いました。早春、公園にある木の枝から水が染み出ているのを見つけ、飲んでみたら、なんとおいしいこと！そんな経験をしているうちに、ふとある絵本のワンシーンが思い浮かんできました。『にぐるまひいて』（ドナルド・ホール作　バーバラ・クーニー絵　もきかずこ訳　ほるぷ出版）です。カエデから樹液をとり、煮詰めて楓砂糖をつくったというページがあります。メープルシロップを取る場面でした。『輝きの季節へ』（ターシャ・テューダー作・絵　食野雅子訳　メディアファクトリー）や『夜明けまえから 暗くなるまで』（ナタリー・キンジー＝ワーノック作　メアリー・アゼアリアン絵　千葉茂樹訳　BL 出版 ）にも同じ場面が出てきます。メープルシロップについて考えていてひらめいたことは、葉っぱの赤ちゃんはまだ自分で光合成して栄養を作ることが出来ない。だから栄養豊かな樹液を含んだ水が葉っぱを育てる役目をしているということでした。葉っぱの赤ちゃんに届く水がミルクの役割をしているとは、なんて自然の仕組みはうまくできているのだろうと思いました。

ミルクを飲んで出てきた葉っぱのあかちゃん。ミズキ、コナラ、アカメガシワ、アジサイ、キリ、イチョウ、オニグルミ。いろんな冬芽の赤ちゃんが出てくる様子をみて、『でてきたでてきたはっぱのあかちゃん』（高柳芳恵文　松江利恵絵　福音館書店）という本を作りました。

■草花あそび



子供たちとアカメガシワの葉っぱを使ったシールあそびもよくやっています（写真）。

また、ドングリがなるシラカシの木を使った遊びもふと思いついた遊びです。

春に出てくるシラカシの新しい葉っぱは、うす茶色をしています。この柔らかい葉を数枚取り、両手に挟んでもみもみするとふりかけになります。でも、どんな種類の木でもできるとはかぎりません。ふりかけになる葉とならない葉があります。主に常緑樹に出来て、なぜ、できない木があるか。いろいろな種類の木で試し、葉っぱの持つ性質を考えていくと、興味深い答えが見つかるはずです。すると、草花あそびって、単純な遊びでは無いことに気づきます。自然の不思議をどんどん気づかせてくれるのが草花あそびです。

■おわりに

高柳さんは、御自身で撮られた写真を使い、分かりやすく説明してくださいました。自然に対する情熱が画面越しでも大いに感じられ、視聴者の方にとっても、普段は気付かないことに目を向けるきっかけになったと思います。

（記録：埼玉県立久喜図書館　鈴木 絵理奈）